



独立行政法人 国立病院機構

四国こどもとおとなの医療センター

アートプロジェクト

—今月のショット—



当院に届いた入院している子どもたちへのギフトと手紙

シリキット王妃小児病院
内の壁画は大口の寄付
によって描かれている。



当院と姉妹提携を結んでいる Queen Sirikit National Institute of Child Health(QSNICH, タイ王立小児病院)建設中の新病院内壁画

2015年 5月号

—院内の小さな声から—

突然お手紙が届きました。そこにはカラフルな色画用紙を精密に切り抜いた親子の動物の切り紙が沢山同封されていました。愛媛県にお住まいの方からでした。その作品の完成度は高く、そのままお店に並んでも不思議ではありません。病院の子どもたちにあげて欲しい。とお手紙が添えられていました。早速ニッチに入れる準備をしていると職員さんがやってきて、「わー。すごい。いいなあ。私もこんな欲しいなあ。」と、とても羨ましそうに言います。「でも、これ、もらえる子ともらえない子がいたら不公になるんじゃないですか？」その人は言いました。「そう。だからニッチがあるんだよ。」私は答えます。誰かに手渡してあげてしまうと、その子だけ特別。になってしまいます。でも、ニッチはいつ、誰が開けても自由。いつ、誰がプレゼントを忍ばずかもわからない。だから、もしプレゼントが入っていたらそれはその子が開けたから受ける事が出来る幸運。ということ。誰にでも平等にチャンスがある。ということだけは守られているのです。「なるほどね」その人は納得した様子。でも、こんな風にももらえる人が羨ましくなるほどのギフトが届くなんて幸せな病院です。



大きなドネーション・小さなドネーション

ドネーション(寄付)には様々なかたちがあります。当院が姉妹提携を結んでいる Queen Sirikit National Institute of Child Health(QSNICH, タイ王立小児病院)には大口の寄付者がいて、その方が院内の壁画を寄贈するというかたちでデザイン業者や塗装業者を手配し、施工しているそうです。当たり前のようにそういう寄付の文化があり、また病院もそれを受け入れている事を素晴らしいな。と思います。また、仏教国らしく街のいたるところにピー(精霊)やバラモンの神々を祀る祠(サン・チャオ)や廟(サン・プラプーム)が建てられていて、生活の水準に関わらず、誰もが日常の中でお花を供えたり、祈りを捧げたりしていることにも驚きます。それは病院の中にもあり、病と向き合う患者の心の拠り所となっているようです。生活にゆとりのあるものが余力をつかって支援が必要な人を助ける。という寄付の文化はタイでは当たり前のように浸透しているようですが、日本では寄付しようとするところに多額の税金がかかってしまうという事もあり、大口の寄付者はなかなか現れないのが現状です。ですが、余力のある人が生活に困った者を助ける。という構造は、素晴らしい反面、弱者と強者の絶対的な隔たりを作り出し、対等に対話することが難しくなるという側面もあります。一歩間違えば寄付する側は自己満足に陥り、受け取る側は発言の権利を与えられないまま、ただ黙って従わなくてはならなくなってしまう。そのバランスはとても難しいものだと思います。当院では「小さなドネーションをいくつも」という発想で沢山の一般市民の方に院内のアート活動を支えていただきました。地域の協力者や全国各地から不定期に届く小さなギフトは、院内にあるニッチ(壁の扉)を通じて患者さんやそのご家族に届けられます。そして、それらの作品を作る人たちは必ずしも生活に余裕がある方ばかりではありません。入院している患者さんや、心に傷や病を抱えた方々が「自分にも誰かのために出来ることがあるなら」という、患者さんと同じ場所に立った深い共感を持って参加してくださっています。余力がなくても、自分が大変でも、誰かのためになることはできます。そして、そうやって届くからこそ痛みを抱えた心に、すっとしみわたるドネーションもあるのだと思います。

今月の一枚

作家: 蒔田 千尋「ソフトクリーム」